

## 「インマヌエルの神」

マタイによる福音書 1 章 23 節

森島 牧人 牧師

今日は四本目のろうそくに火が点って、主イエス・キリストの誕生日・クリスマス礼拝の日となりました。みんなで一緒にお祝いしましょう。

お手元にコピーしたものがあと思いますが、今日は、百年ほど前の一人の少女とニューヨーク市にある新聞の編集者との、手紙のやりとりのお話から始めたいと思います。少女の名前はヴァージニア、8歳でアメリカのニューヨークに住んでいました。クリスマスが近づいたある日のこと、自分の友人たちが「サンタクロースなんかいない。」と言っているのを聞いたヴァージニアは、家に帰ってお父さんにサンタクロースがいるのかどうか尋ねます。お父さんの答えは「サンタクロースがいるかどうか、「サン新聞社」（お父さんがいつも読んでいる新聞）に聞いて見てはどうか」というものでした。

そこでヴァージニアは早速、「編集者さま 私は8歳です。私の何人かの友だちはサンタクロースはいないと言います。パパは『サン新聞がいうことならそのとおりだ』と言います。どうか私に本当のことを教えてください。サンタクロースはいるのでしょうか。ヴァージニア・オハンロン」という手紙を書き、サン新聞社宛てに送ったのです。すると間もなくサン紙面に「サンタクロースはいるのですか」をタイトルとした大きな記事が出て、そこには「ヴァージニアさん、君の友達の間違っています。サンタクロースはいます。」という、彼女の手紙への返事が、フランシスという編集者名で掲載されていたのでした。

この子どもと大新聞社とのやりとりは大きな話題となり、有名な話となって行きました。というのは、この後毎年クリスマスが近づくと、この記事への問い合わせが多く寄せられるようになり、遂にサン新聞では、毎年クリスマスの時期なるとこの記事を紙面に載せるようになったのです。それは百年経った今でもコラムという形で掲載され続けています。

さて、ここで問題となった「サンタクロース」ですが、このサンタさんにはモデルがあって、それは、AD 270年頃トルコに生まれたニコラウスというカトリックの神父でした。お金持ちの子どもに生まれ、心の優しい立派な人として成長したニコラウスさんは、両親から受け継いだ大きな財産を貧しい人々のために使い、多くの子どもたちや家族を助けていきました。その一つのエピソードは、貧しい靴屋が、上の娘を嫁がせるのに必要な持参金のために、下の娘を売ろうとしていることを伝え聞いたニコラウスさんは、窓からお金をそっと差し入れて一家を助けました。このように、ニコラウスさんに助けられた人々は数え切れないほどでした。誰にも知られないように気をつけていたニコラウスさんでしたが、やがて人々の広く知るところとなり、亡くなった後も聖人と呼ばれて人々に慕われたニコラウスさんは、カトリック教会でも認められ、聖ニコラウスとして聖人の中に加えられたのでした。

旅人や船乗りの守り人としての聖人ニコラウスの名前は、広くヨーロッパ中に知られるようになり、彼の亡くなった日である12月6日には、聖ニコラウスの日・子どもの日として祭りが行われ、ニコラウスさんからのプレゼントを期待して子どもたちは窓の近くに靴下を吊るすことになりました。やがてヨーロッパの教会はカトリックとプロテスタントに分かれ、プロテスタントでは聖ニコラウスのお祭りはなくなりますが、ニコラウスさんを真似て赤い上着と帽子を身に着けたおじいさんが、子どもたちのところへ行くということになりました。

「サンタクロース」は、「セント・ニコラス」をオランダの訛りで読んだもので、北欧ではサンタクロースはトナカイ8頭の引くそりに乗って子どもたちを訪れるという話になりました。そして、ほどなくサンタクロースのお話はヨーロッパからアメリカに伝わり、世界中の人々がサンタクロースを知ることとなりました。ニコラウスさんの愛の行いが世界中に伝わったのです。

ところで、皆さんはお店などで「X'mas」と書かれたポスターを見たことはありませんか。「mas」はミサ・礼拝で、この「X」は聖書の中の古いギリシャ語のキリストスの頭文字を取ったものです。英語ではクライストで、「Christmas」は<キリストを礼拝する日>という意味です。今ここでみなさん方が一緒に礼拝をしているのが、まさにイエス様がお生まれになったことを礼拝してクリスマスなのです。そうです。<愛>の神様がお生まれになったのです。これが私たちの、この教会のクリスマスです。

(説教要約 羽入田悦子)